

# 日本災害看護学会先遣隊 令和6年能登半島地震活動報告

2024年1月8日(月)

活動隊員：酒井彰久、斎藤正子、藤田さやか、矢野貴恵、佐藤大介

## 1. 活動日時

2024年1月8日(月) 7:30~18:00

## 2. 活動場所

珠洲市健康増進センター(珠洲市保健医療福祉調整本部)

## 3. 被害状況

人的被害：石川県死者168名、倒壊による生き埋めなど安否確認中(8日14時現在)

住家被害：建物全壊1390棟、床上浸水6棟、床下浸水5棟(8日14時現在)

道路被害：穴水から珠洲、輪島に向かう道路は、一方通行となった。7日21時からの降雪による通行制限は8日に解除された。

## 4. 天候

曇り時々雪 最高気温4℃、最低気温1℃

## 5. 活動の実際

### 8:00 珠洲市健康増進センター・保健医療福祉調整本部ミーティング参加

金沢市に大規模な避難施設ができて、要支援者と家族1名の付き添いで入所できる者をピックアップしていく段階とのこと。課題としては、移送方法と、他の家族と離れてしまうことなどである。本部のある建物と同じ敷地内に1.5次の避難所として、福祉避難場所を設置準備中であるとの情報も得た。

### 9:00 蛸島小学校・蛸島保育園を巡回

#### 蛸島小学校：

各部屋の住民の居場所の把握と内服薬について聞き取り調査をボランティアの地元の看護師と共に継続した。内服薬不足についてモバイルファーマシーのフローチャートをもとに実施した。

体育館に避難されている高齢者で避難所に来てからADLが低下され、トイレへの介助が必要になったケースや被災後から現在もパイプ椅子で座ったまま寝ているという高齢者のケースに対して、自宅に戻られた方のダンボールベッドを使用するように運営者に依頼した。しかし、自宅に戻った被災者の毛布や座布団がダンボールベッドに山積みになってキープされている現状があった。自宅に戻られた被災者の荷物について避難所運営者がルールを作ると話されていた。体育館のダンボールベッドを搬入した場合のレイアウトについて、避難所運営者により図面で作成されていたため確認とアドバイスを行った。

昨夕、家庭室(福祉避難場所)の高齢寝たきりであり、基礎疾患のある被災者が発熱して緊急搬送され入院したと報告があった。長引く避難生活により、要配慮者の体調が悪化するケースが増えている。また、外部支援者が発熱と頭痛、咽頭痛があると健康相談があった。感染症の可能性があるが隔離できないため帰宅して頂いた。今後、被災者が発熱した場合に隔離できる部屋の確保やスペースについて相談がありアドバイスを行った。

個別ケースでは、寝たきりの避難者についての新たな情報があり巡回した。1階理科室に90

代男性と娘が避難しており、男性は昨年10月からイレウスと誤嚥性肺炎で入院しており、12月24日に退院したところである。娘によると、褥瘡ができていたとこのことで看護師2名により確認した。尿・便によりオムツと寝衣が汚染しており、交換を行った。介護衣類や防水シーツは不足しており、洗濯もできないため数日交換をしていない場合もある。褥瘡は元々右側にできやすく左側臥位にすることが多くなったとのこと。さらに除圧マットレスがないことで褥瘡が悪化している状況があった。ガーゼ交換で対応し、本部にて移送案件として報告した。

体育館のストーブが本日5台、壊れて使用できなくなり早急に修理と代用を依頼していると避難所運営者から相談があった。夜間は寒いので心配であると報告を受けた。様子を見てみると昨日までストーブの周りで話をしていた被災者は少なくなり、布団に入っている被災者がいた。夕方に再度確認したところ、石油缶に誤って水を入れてしまったための故障であり、修理済みであるという報告であった。

気温低下する時期に十分な暖房器具がないことや、適切なケア用品が不足しており、健康状態の悪化が懸念される。日々、被災者の体調や健康に対するニーズが変化するため、災害関連死を予防するために今後も地元の看護師と外部支援の看護師の支援が必要である。

#### 蛸島保育園：

昨日からのケースの確認のために巡回したところ、仮設トイレが増設されており、電気も来ていた。医療・健康班からは、早速、部屋ごとにラジオ体操を実施したとのこと。入所者の反応はよく、どの部屋でも参加されていた様子。施設放送設備も使用できるようになったため、活動を増やしていく予定とのことであった。

個別ケースでは衰弱状態で入所してきた高齢者夫婦は、医療・健康班の看護師の介助により食事も全量摂取しており、本日は自身ですでに座位になっていた。不整脈は認めない。血圧は150/70と高めで頭痛はある様子。看護師に経過観察を依頼し、本部に報告した。

住民同士で協力体制があり、環境改善に取り組んだり、避難者へのケアは優先順位を考えて実施している。また、適宜、外部支援者に相談し助言を得るスタイルが確立できており、物資も十分と言えないながらも非常に明るく生活されている印象がある。最初に巡回した4日から劇的に改善された避難所の1つであり、今後も相談対応を継続していく。

## 6. 考察

担当の避難所が固定化してきて、継続的に介入することができている。運営を外部支援に頼っている避難所、自力で運営している避難所と様々あるが、適切に助言することで環境改善につながっているため、疾病予防と健康維持の観点から引き続きアセスメントを実施していく必要がある。健康状態の悪化による救急搬送も依然見られているため、リスクの高い避難者については福祉スペースや福祉避難所への移動を積極的に検討し、避難所運営スタッフの負担を軽減していく。介護用品などの物品の不足は、遠慮などで避難者本人・家族から申し出が得られにくく、すでに入っている支援物資での代用で賄っている状況である。個別ニーズを抽出し、代弁者として調整本部や行政につなげていくことも重要であると考えられる。

## 7. 参考写真



DHEAT との連携



褥瘡（水疱化）



活気のある避難所運営スタッフ

※写真撮影の許可は得ています。